

# あるリードオルガンの物語

---

大 森 幹 子

大阪芸術大学短期大学部通信教育部  
なにわNo.240(平成14年1月10日)抜刷りより  
平成 25 年 6 月 印刷 (土倉事務所)

## あるリードオルガンの物語

大 森 幹 子

私の名前は「松本オルガン」。  
明治20年代半ば頃に千葉県で生  
れたリードオルガン<sup>(注1)</sup>である。現在  
は、京都市山科のオーモリさん宅  
に住んでいる。

しばらく私の話に耳を傾けてほ  
しい。

私の父（製作者）の名を、松本  
新吉という。

慶応元年生れの父は、22才の時に  
ピアノ・オルガン製造の見習いに入  
った。私は30才前の作品という  
ことになる。



松本オルガン(松本楽器合資会社)

当時の日本は、西洋音楽の黎明期であって、それを奏でる楽器の充実にはほど  
遠い時代であった。父は、外国から輸入するしかなかったリードオルガンを、日  
本人が作りはじめた草分けの一人である。

私は、父とその松本楽器合資会社の製作したリードオルガンの中では、二番目  
に大きくデラックスなものとのことだ。工場が火災で全焼したので、大正4年に他  
会社と合併、事実上松本楽器合資会社はなくなった。それまでに生れた私の兄弟  
は、現在のところ日本中で5~6台しか存在が確認されていないのは、残念なこと  
である。

大正時代のはじめに、東京・赤坂に建てられた霊南坂教会に買いとられて、居  
が定まった。建築史上に残る立派な教会堂で、大中寅<sup>(注2)</sup>二作曲のリードオルガン曲



を、大中寅二自らによって、毎週日曜日の礼拝で奏でられるという、華々しい門出であった。多くの人々が私の音で賛美歌を歌い、祈りを捧げたのだったが、60年もの間、この教会でリードオルガンを弾きつづけた大中寅二も故人となり、いつの間にか私は、表舞台から会堂二階の客室にこもるようになっていた。

霊南坂教会々堂も老朽化し、建て替えることになった頃には、音も出なく、板も反りかえってボロボロになった私は、省りみられることもなく、悲しく晩年をかこっていたのであった。

私を修理して新会堂に置く計画はないが、捨てるにはしのびない、誰か欲しい人がいたら……。と教会で話が決った一週間後に、京都のオーモリさんが偶然東京に現れたのだった。

不思議な邂逅であった。

かつて、学生時代に、霊南坂教会の聖歌隊の一員として歌っていたことのあるオーモリさんは、私を弾いた記憶があった。迷うこともなく「私に下さい」「どうぞ」となり、私はあれよあれよと云う間に、トラックに乗せられて、長野県長野市在住の調律師フジサワさん宅に、運ばれて行った。

長野市は、戦時中にオーモリさん一家が移り住んだ地で、青春時代を過ごしたところという。

音が鳴るだけでいい、形が元の通りになればいい、余生を一緒に過そうよとのオーモリさんの同情であったと思う。

一年近くかかって、私を解体修理をしてくれたフジサワさんは、「もう二度と治す気力がなくなった」と思うほどに精魂盡き果てた作業だったという。

再びトラックに乗って、山科まで私は運ばれたのだった。半世紀以上も霊南坂教会から出たことのなかった私には、大移動の連続で、行く先への不安が一杯だったが、京都では、調律師のカトーさんが、主治医として私をうけついでくれたのは、幸いであつたし、一生のつき合いが始った。

オーモリさん宅には、既に二台のリードオルガンがいて、私を迎えてくれた。

一台は、今80才にはなる日本楽器横浜工場製作での9個ストップ<sup>(注3)</sup>。オーモリさんが子供の



日本楽器オルガン  
(日本楽器製造株式会社横浜工場)



頃に祖母が買ってくれたという。大阪生れのオーモリさん宅が、戦時中空襲にあり、爆弾の破片が家の中を暴れまわったとかで、オルガンは足に負傷していたが、弾くことには支障がなかったので、以来長野市へ一緒に逃げて行き、オーモリさんが京都へ移り住む時に、又ついて来たという。竹馬の友ならぬ、一身同体の存在である。リードがドイツ製のこのオルガンは、実に堅実な音を奏で、控え目な性格をもっている。

もう一台は、オーモリさんの夫の所有であって、やはり70才にはなっているだろうと見かけられる。9個ストップのヤマハオルガンである。過去の経歴はあまりはっきりしない。何でも楽器会社の倉庫に長い間眠っていたということだ。素直な、いい音色だ。

こうして私達三台は、仲良く四畳半の部屋に住むことになった。狭いが、オーモリさんが一人楽しんで弾くだけのことだから、広さは気にならなかった。予想した以上に私が立派に復元したので、オーモリさんはご機嫌で、友達に自慢したりしていたが、それ以上のこともなく何年かが過ぎた。

ある時急に、新しいリードオルガンを買いたいと、オーモリさんは考えた。思いついたら最後、どうしても欲しくてたまらなくなっただけ。理由は後からついた。即ち三台のオルガンはご老体でいつも労わり乍ら弾かなければならない。思いっきり鳴らしてもビクともしない若いオルガンが欲しいと。かくして強引に入手したのが、イタリー製のデルマルコオルガンである。シンプルなデザインでとても明るい音色は、さすがイタリアと思う。ストップは15個。四畳半の部屋にもう一台仲間が増えた。

10年前、オーモリさんはたった一回だけのリードオルガンのコンサートを開こうと考えた。単なる思いつきではない。長い年月心の底に燻りつづけていた思いの発露であったようだ。

半世紀もの昔、オーモリさんが東京の学校で保育を学んでいた時の音楽の先生が大中寅二であった。子供の頃からリードオルガンを弾いて



ヤマハオルガン  
(ヤマハオルガン浜松)



デルマルコテセロ  
(イタリー製)



いたオーモリさんは、個人的に大中寅二に師事し、リードオルガンの奏法を学んだ。「リードオルガン奏者の道を選ばないか」と師から勧められたが、困難であろう道に怖れをなして「私は保育の道に進みます」と逃げたのだった。その後も大中寅二没するまで30年余も師事しつづけたが、決してオルガンと一緒に表舞台に出ることをしなかった。

多くの人々に惜しまれて大中寅二は86才で天国へ旅立った。大きな支柱がスポンと抜けてしまったままの年月が経った。

オーモリさんが、大中寅二から得たもののふり返りと、問い直し、これから独りでリードオルガンに関わっていく姿勢の模索のための一念発起だった。

大中寅二没後10年の記念を、マツモトさん(いつの頃からか、オーモリさんは私のことをマツモトさんと呼ぶようになっていた)の披露を兼ねてのリードオルガンコンサートを企画したのだ。勿論、プログラムは大中寅二の作品が主である。

不安は山程あった。リードオルガンを舞台にあげてのコンサートの前例が殆んどない。オーモリさんは、デビューするにはあまりにも若くない。オルガン弾きとしての知名度はゼロ。それでも、人が聴きに来てくれるか。

にもかかわらず、オーモリさんにとって、多分最初で最後になる筈のコンサートの準備は進んでいった。マネージャは、オーモリさんの弟コバヤシさんが引き受けてくれた。出来てきたチラシには、私が一面に大写しされている晴れがましいものだった。

恥しい演奏をしないようにとのコバヤシさんの叱咤激励は、オーモリさんにとって大変な重荷だった。

こんなにオーモリさんに練習されることはなかった。特に日が近づくと、1日に8時間も弾き続けることが多くなった。そこまでやられると、私も重圧に耐えられないことも度々になる。音が出なくなったり、雑音が入ったり、内部の部品がはずれたり…と、その度に主治医のカトーさんは、早朝でも夜中でも駆けつけてくれた。納得のいくまで手をかけてくれる名医である。カトーさんがいなければ、とてもコンサートには耐えられなかったであろう。

ところが、オーモリさんは練習を重ねるほどに私と反りが合わなくなると嘆きはじめた。いい演奏をしようと焦れば焦るほど音楽にならない。ぎくしゃくする。とうとうオーモリさんは匙を投げてしまった。「マツモトさん!あなたはどうか弾いて欲しいの?」大きなため息をつきながらオーモリさんがこう云ったとき私は、「ああやっと気付いてくれたか」との感慨をもった。私はだてに100年余も生きて



きた訳ではない。そう簡単にあなたの思い通りになるものか。長く生きていくということは、自我をしっかりと確立していることなのだ。私の歴史を、生き様を無視して自分だけの力で巧く弾こうなんて、思い上がりである、私は私であると抵抗していたことがやっと分ってくれた。

オーモリさんは、素直に私に対峙するようになり、弾いてやる…の思いが消えたようだ。それからは、始終私に沿うことで、音楽の仕上げをしたのだった。

一方、マネージャーのコバヤシさんは、このコンサートの成否の読みが全くできないと悩んでいた。聴衆が殆ど来ないか、超満員かのどちらかだろう、丁度ほどほどということはないだろうと。

いよいよコンサート当日。会場の大阪倶楽部の入口には、開場の一時間も前から多勢の人々が並びはじめた。後者の読みが当たった。

開場時間を早めたり、補助椅子を出したりと大わらわの一幕があつて、演奏会は始まったのであった。

私とデルマルコさんが舞台の中央に晴れがましく並んだ。

楽屋で緊張しきっていたオーモリさんは、それでも見かけはさっそうと登場したが、鍵盤に触れる指が、細かくふるえているのが、私に伝わってきた。さあ、一緒に演奏するんだよ。自分だけで頑張るのはやめなさい。私にまかせて。今まで以上にオーモ



大森幹子リードオルガンコンサート  
(於 大阪倶楽部のステージ)

リさんは、私が鳴るにまかせて弾きはじめてのだった。超満員の人々の中で私の音が会場内に響くだろうかというのが、オーモリさんの直前までの心配ごとであつたらしいが、一世一代の舞台とあつて、私は思いっきりの底力を発揮した。鳴った、鳴り響いた。強い音も弱い音も。リードオルガンがこんなにも立派な演奏用楽器であると聴衆の皆さんは、初めて知ってくれたであろう。

この夜、ドレスを着てオーモリさんが演奏したのは、長い年月日本の音楽の発展に、陰の貢献をしてきたリードオルガン達への敬意の表わしであるとのことであつた。

私とオーモリさんの最高に嬉しい一晩であつた。

いつまでも、いつまでも興奮はさめなかった。

それにしても予想をはるかに上回って、多くの人々が集って下さり、リードオ



オルガン愛好者の層の広さ、厚さを肌で感じた私とオーモリさんは、嬉しかっただけでは済まない何かの使命のようなものを感じたことは確かであった。

一回限りの筈であったコンサートから私達は思いがけない筈に到達した。リードオルガンとその演奏を、もっと広く知って貰いたい。そのためにいいコンビを組んでいこう。そして、様々な可能性を一緒に追求してみよう。

ところで、この数年ほどの間に私の仲間は増えつづけてしまった。

アメリカのメーソン&ハムリン社製のリード(注4)オルガンが手に入ったらなあ、オーモリさんは何10年も叶わぬ夢を見ていた。叶わないことがわかっているからこそ無責任にカトーさんに「メーソンオルガンが見つかったら教えてね」と事あるごとに話をしてきた。

カトーさんは、オーモリさんを喜ばせたいと思ったのであろう、何とアメリカで120才位のメーソンオルガンを見つけて持って来てしまったのだ。まさかとオーモリさんはびっくりした。古きよき時代のアメリカを彷彿する堂々とした貫禄たっぷり15個ストップのオルガンを見てしまったら欲しくなるのは当然であるが、置く場所の問題、値段の問題、住居がどんどんオルガンに浸蝕されて我慢の限度に来ている夫の問題、どうやって乗りこえようかと悩んだ。悩みつつも心は決っていた「買うぞ」。そこで少々狡い作戦に出た。地方で独立しているオーモリさんの息子に電話をかけたのだ。息子の一と言「買うしかないだろう」で夫は仕方なく納得した。大森家に大きなメーソンさんがやって来たので、私達はとうとう四畳半から出て、この家の唯一の接客の場である応接室になだれこんだのである。その部屋には、グランドピアノと、大きな電子オルガン・クロダトーンが先住していたので、私達のせいで来客用の椅子・テーブルのセットは、外へ運び出されてしまった。

勢いによって——誰が？オーモリさんだ——一昨年、見ることも叶わない筈だった、アメリカのもう一つの楽器会社エスティー社のオルガン(注5)まで、カトーさ



メーソンアンドハムリンオルガン  
(アメリカ製)



エスティーオルガン  
(アメリカ製)



んは探して来てしまった。

メーソンさんの時と同じ手順で、息子に電話、息子の「買うしかないだろう」で、エステーさんが加わった。彫刻の美しい、鏡がついて棚もついている、装飾たっぷり、見映えは最高のこのエステーさんは、澄んだ音色が素晴らしいが大きさもとてつもない。応接室には入りきれなくて、居間の一角の壁に、天井までぴったりと張りついて居座ってしまった。ストップは17個もある。日本人に好まれる音色のエステーさんである。

実は、オーモリさんより魂胆はカトーさんにあったのかもしれないと私は思っている。謀られたのはオーモリさんだったようだ。「これで世界の三大名器が揃った」とカトーさんはほくそ笑んでいるからだ。

昨年2月に、コンサートをした時、私と、エステーさんと、ストップなしのヤマハさんが、ステージに並んだ。かつて、どこの学校にもあったようなタイプの戦後生れである。当日のためにちょっと借りた筈のヤマハさんがオーモリさんは、コンサートが終っても返さなかった。そして仲間が又一台増えた。日本の学校音楽には、このオルガンがイメージにぴったりである。小ぶりであり場所を取らないいい子である。

求めなくてもオルガンがやって来る。昭和のはじめに生れたヤマハのベビーオルガンを京都の老舗の奥さんから、貰ってほしいと云われたのも昨年だった。鍵盤数が少なく、一人で持ち運び出来る大きさのこのオルガンは、どうしてなかなか立派である。小さいながら凝った彫刻がある上に、両側に燭台までついていて、総二列笛で華やかな力強い音がする格式のあるベビーちゃんだとオーモリさんは云う。が、残念なことに、私達に会うことなく、このベビーちゃんは、息子一家にプレゼントとして、行ってしまった。この間、孫が弾いているポーズの写真を送って来た。

リードオルガンの収集家ではないし、マニアではない、とオーモリさんは頑強



ヤマハオルガン



ヤマハオルガン  
(ヤマハオルガン 浜松)



に言い張っているが、どうして、ここまでくれば十分に他人の目にはマニアである。本人は、いたくその言葉が気に入らなくて否定しつづけてはいるのだが…。私は、オーモリさんの性格を知っているから、絶対にマニアではないと思う。

今は、何台ものオルガンが、ひしめき合って物置き状態になった部屋に住んでいる。沢山のオルガンを使って、アンサンブルをしたら楽しいでしょうね、と友人達は云うが、それが出来ないのもオーモリさんは困惑している。何故なら、戦前生れのリードオルガンは、製作者の好みそのままに音作りがされたので、夫々にピッチが異なる。<sup>(注6)</sup>私と同じ部屋にいる仲間達は何とみんな違う音程を奏でるので、同時に弾くとその微妙なピッチのずれは、神経をいらだたせるだけでなく、決して美しくハーモニーしない。私も現代の規格よりかなり低いピッチであるために、音が落ち着いて響き、聴く人には心地よいのだが、間違っても皆と同じにはならないぞという意地と、見識を持っている。リードオルガンは孤高な楽器であったのかもしれない。その孤高さゆえに、現代に生き残りにくかったのかもしれない。

しかし、100年余を生きた私は、この先まだ100年も200年も生きつづけ、鳴りつづけることができると確信をしている。

話を戻そう。

はじめてのコンサートは、私が多勢の人の前で演奏することが十分に可能だと、自信をもたせてくれた。決して思い上ったり、調子にのってはいないが、リードオルガンが過去の楽器ではない、今を生きる楽器であると自覚するようになった。

私の生き方は大きく変わった。結構忙しくなったのだ。乞われれば、トラックに乗って出かけるようになった。神戸・大阪・横浜・東京と、演奏の場数も踏むようになった。

「マツモトさんの姿を見たい、音を聴きたいという人がいるから、一緒について行って弾かなければならない」とオーモリさんは半分ボヤきながらも喜んでついて来てくれる。オーモリさんとは二人三脚でいつまでも演奏していきたいと願っている。

近年オーモリさんが有頂天になって喜んでいることがある。現代の作曲家達が、リードオルガンのための曲を作りはじめて下されたことだ。

私もどんなに嬉しいか。リードオルガンを、演奏楽器として認知して下さったなど、多少はうぬぼれてはいる。

萩京子氏が、林光氏が、大中恩氏（故大中寅二の子息）が、夫々に組曲を作曲して下さりオーモリさんが厚かましくも、それらを初演しつづけている。私もと

もに初演するのだからその度に緊張して一喜一憂しているが、初演のむずかしさを承知しているからこそ、オーモリさんの力量と度量の不足を案じている。もっと頑張れよと、叱咤激励をしつづけているのだが…。生来のなまけものが災いしてオーモリさんは中々上達しない。やはり才能がないのかなと思ったりもするが、悲しくなるから少々目をつむってやりたくもある。

ちょっと甘えさせてやるならば、仕事が終わって帰宅するのが夜11時頃、それから夜中まで練習する姿をみると、ほんのちょっぴりかわいそうでもある。

それでもオーモリさん、去年は大阪と東京と二回もコンサートをよくやったね。もうへとへとだろうと思う。

ところで、これからの私達は…。

…きりがいいから、いい加減に話すのをやめなさいと、オーモリさんが云い出した。

今年は私達と仲間のオルガン達とで何をしようか、とか、オーモリさんがこの世からいなくなった後は、私を誰がどうしてくれるのか、とか、やはりきりのない話は続きそうだ。この辺でやめることにする。

冗長な話を傾聴して下さい、感謝である。

保育学科・教授

- 注1. 足で踏み板を踏むことで、空気を送りこみ、リードを鳴らすオルガン。(足踏みオルガン)
- 注2. 作曲家「椰子の実」の作曲家で有名。  
リードオルガン曲を1000曲作った。
- 注3. オルガンの鍵盤の前に並んでいるボタンの様なもの。出し入れすることで音色が変わる。
- 注4. )
- 注5. ) アメリカの二大楽器製造会社だったが今はない。
- 注6. 楽器の音の高さの基準。現在は国際的に440ヘルツに統一されている。